

ちょっと美術が好きな人へ「現代社会における美術（アートの在り方と見方）」

はじめに

市井(しせい)の美術家からの提言

私は美術家を志、1978年に多摩美術大学に入学しました。学生時代は心象イメージを色彩構成的に表現する手法を用い、コンピュータ・アートや版画のシルクスクリーン、リトグラフ、グラフィックデザインや造形制作に没頭し、大学3年時には美術公募展等で入選入賞を果たし、それなりに手ごたえも感じていました。卒業後は生活の糧を得るために、総合印刷会社に就職し、企業の販促物を企画制作する部門のアートディレクターとなりました。

数年で退職するつもりでしたが、企業カレンダー制作の専門部署に配属されたとき、モチーフとして泰西名画や現代絵画等様々な美術品に直接、または間接的に触れました。カレンダーの絵柄として使用する絵画等の使用許諾を得るため、作家や著作権継承者との交渉が事務的に生じます。作家に対して企業販促物の制作・製造趣旨、いわゆるコンセプトを示さなくてはならないからです。言い換えれば、自分が住むべきと欲していた美術界の、無限のエネルギーに曝されたのです。アートを自分の都合の良い時に“こちら側から見つめる”立場でもありました。

20代中頃から～30代前半、私は仕事を通じ“絵画作品”を企業販促ツールのモチーフとするため“該当作家の活動と作品趣旨の理解に努め”、その結果、さまざまな作家の思考の片鱗に触れました。当時、私はその心地よさに永く浸っていたいと感じていました。その後、アートディレクターを経て管理職となり、人事管理やコスト管理に多くの時間を奪われるようになると、アートとは距離を置くようになり、いつしか美術家志望の想いも心の奥深くに隠れてしまいます。やがて大好きだった美術館すら、めったに立ち寄らなくなっていました。

しかし2003年ころ、ある画廊のキュレーターとの雑談で、日本の若手アーティスト達に対し、二人とも同じ印象を持っていることに気づきます。それはかなり多くのアーティストが“自分に課す、あるいは世に問うべき「本質的テーマ」を見出せないでいるようだ”ということです。時まさしくバブル崩壊後の不安定な社会、日本の世情と符号していました。

もちろん注目され、活躍しているアーティストの中には、強い使命感を持ち、社会に対する提言や問題提起をそれぞれの作品に込めています。表現に拘り、オリジナリティーの追求をし、パフォーマンスで表現するのか、タブローで具体的に表現するのか、または自身の身体を使うのか、その姿勢はひたむきです。それぞれの場のエネルギーが見る側を刺激し、感性の循環が

起り、時として社会現象を引き起こします。でも日本のアーティストは「本質的テーマ」を自ら見出し、主張することは悲しいほど不得意であり、その必要性を自覚していないのではないか、と感じています。制作環境の影響も大きく、彼らの創作意図を代弁する美術評論家や画商の言動に、作家自身が左右されているのも、また事実だと思います。

感性の循環には良い・悪いといった、「程度の違い」があると私は考えています。前述した本質的なテーマがない作品とは、表層的に他者のスタイルを真似、オリジナルティーがない作品群を指しています。例えば作品を挟んで作家と鑑賞者が具体的に対峙し「イメージ」を伝え合うのかできないのか、と想像するとわかり易いかもしれません。作品を媒介し、人が人間的に成長して行くプロセスでもあると思います。

2011年3月11日の東日本大震災後、復興を願う団体・個人の文化を基盤に置いた支援活動が多く見受けられました。どれだけの人が癒され、生きる希望を見出したのでしょうか。反面、相変わらず「本質的なテーマを見出せないでいる」アーティストや作家は減ることはなく、むしろ増殖しています。ネットの交流サイトに流れ、あるいは専用サイトやフリマを介して取引されるさまざまな作品群は、少なくとも10年前とはまた違った存在となっています。ほとんどが悲しいほど個人主義的であり利己的な印象を拭えません。

その多くは、美術愛好家や専門家はその作品価値を認めていない領域の作家達と感じています。しかし社会現象として捉えると、例えば彼らが望む取引額が極端に安い場合や、反対に極端に高額であるので、「対価としての適正」については疑問点も多く見過ごせないと考えています。商業的価値を重視した個々人の価値観に対して社会を頷かせる理念的価値とそのあり方をどう捉えるのか、ポイントは感性の循環だと思います。

学生の時、ヴィクトール・E・フランクが著した『夜と霧』を読み、この本の要点のひとつに強く興味を持ちました。それは、“常に美を感じ、あるがままの美を受け入れることや、常に笑いを忘れない者が、生き延びる（可能性が高い）”ということでした。やがて私は「美」と、その「価値」を考えるようになりました。

本稿の内容は、美術館など一般の人々が日常訪れやすい美術スポットを上手に活用し、美術作品を楽しむことに主眼を置いています。従って美術作品を投機対象として取り扱ったり、コレクターとしての先見性を養ったりする目的で書き下ろしたものではありません。重視していることは、人は「どのようにして美術を発展させてきたのか、そして人々はどのように美を受け入れてきたのか」。

現時点で、私は市井の美術家です。ただ自身の拙い美術や絵画保存修復の知識、そして好き嫌いの多い鑑賞層を通じ、本稿のタイトルである「現代社会における美術」を自分なりに推敲、整理し。さらに自身の企業人経験を加味した時、今日的な問題や課題の根を多方面の方々と共有できるのではないかと、そしてそれは「次の世代の知恵となり得る」、と不遜にも考えているのです。さらに共有した視点や手法・作法を他に見立てれば、新たなアイデアや行動のきっかけになるはずで

例えば世界の様々な地域に発生した美の系譜、そこには生命樹のような美の系譜が見取れます。DNAの解析から人類を読み解くように、文化文明の発展そのものである美の系譜に埋め込まれている次代へのアンカーを見つけることも、可能だと思います。豊かな社会を実現するためには、「事物の探求」と「上位への向上（拡張）」が重要です。言い換えれば、「自ら考え、自ら成す」ここが、今日の日本人、特に若い世代に一番不足していることだと思うのです。

一般的な近年の美術館入場者にとって、鑑賞するモノは“既に芸術作品として評価されたモノ”という意識が強く、「何かを感じ、何かを見出す」ということと「自分なりに考え発展させていく」という視点を忘れ、ただただ有難く鑑賞するのみの方々がほとんどではないでしょうか。在るものを素直の受容することは、素晴らしいことですが、反面、変化を拒む要素であると思います。

思考することの源があるとすれば、モノや事を通じ「何かを感じ何かを見出す」ことだと思います。原始の時代から繰り返されているこの行為にこそ、人間の人間たる所以(ゆえん)が秘められています。それ故に、人間が成長するひとつの方法として、美術を楽しむという外的要因により自身の成長を自覚することが、できると思います。

つまり、子供の頃から絵画や自由な発想に基づく現代アートなど、個々人が馴染みやすい方法で美術を楽しむこと。それは、一般の人々が「日本（世界）の良し悪し」を、美術を通じて再認識し、常に漸進するために能動的に社会をデザイン（リ・デザイン）する行為に繋がります。そうすれば、きっと日本（世界）は素晴らしい秩序と調和を得ることができるのではないのでしょうか。